

<毎月の学校便りの裏面1 / 3に掲載しているものです>

ふるさとの先輩から

徳永 廣敏さん（昭和39年3月 御船中卒業）

私は、昭和23年（1948年）生まれ、現在74歳です。私たちの中学時代はまだ戦後間もなく、学校生活が楽しい時に寂しく厳しい時が何度も何度もありましたが、友達の絆は強く、頼りになることが多くありました。今でも会えば「〇〇ちゃん」と呼ぶのです。

中学校では、今の先生方と少し違って特徴が強くあったことが心に残っています。「イレブン」「マッチャン」「ウメチャン」という先生方が強力な先生方です。イレブン先生は理科担当で強力なピンタをいただき感謝しています。科学・化学クラブの指導者で、よくクラブ4人組で泊まり込んで実験をしたものです。

マッチャン先生は寺の住職で社会の先生でもありましたので、説法が得意で話されることが納得できました。その中に「お前たちは将来、半分は自分の為、あと半分は他人の役に立つ使命をもっている」と言われた言葉が、齢が過ぎて大事なことだと思ふようになり、努力しています。

ウメチャン先生は人の好いおじさんタイプで口数は少なかったのですが、私たち生徒の性格を見抜いているようで、素直に話を聞いて授業を受けていました。いろいろな先生方の影響を受けて中学時代を過ごしました。

中学生の皆さんは、コロナで思い通りの活動ができずにストレスもたまり、辛い毎日が続いていることでしょう。先生方や親と話をしたり、友だちと遊んだり、一人で散歩したりしてストレスを発散して勉学に頑張ってください。これからも皆さんを地元で応援しています。1960年代に中学生時代を過ごした老人より

ふるさとの先輩から

成瀬 徳晃さん（昭和53年3月 御船中卒業）

私は、昭和50年4月に木造旧校舎の御船中学校に入学しました。教室はすべて1階で、2階は職員室、校長室だったという記憶があります。

昔は、先輩後輩の縦社会でしたので、1年生が上級生の教室前を通ることは度胸が要ったものでした。

そんな中、私はバスケット部に入り、3年間頑張りました。まあ一鍛われました。特に、1学年上の先輩には補強など色々特訓を受けましたが、おかげで大きい声での挨拶等が出来るようになり、今日では、そんな先輩方に可愛がってもらっています。

2年生になった時、バスケット団体選手の、あの先生が来られました。元々強い部だったので、村上先生方が3年生の時に始まった郡中体連連続優勝を自分たちが3年生の時も守ることが出来ました。

私が2年生の時に3階建ての現校舎の建設工事が始まり、3年生に進級した時に完成し

ました。新校舎第1号の3年4組で一年間過ごしました。当時、椅子や机を引いて床に傷がつくと、よく怒られたものでした。

私は、昭和63年に家業を継ぐ為、御船に帰ってきました。15年ほど前から御船中の地域のお世話役として行事に参加したり、授業を参観したり、部活に関わったりしています。中学生とコミュニケーションがとれることが喜ばしいことであり、私の財産です。今年はずいぶん職場体験にも来てくれて、いろいろ楽しくお付き合いさせていただいています。

最後に、御船中の生徒さんへ。

元気な声での挨拶と多くの知り合いを作ることは、大人になってからも絶対に為になりますよ。

ふるさとの先輩から

本田 恵美 さん (平成元年3月 七滝中卒業)

私が中学3年生の時、元号が昭和から平成に変わりました。今は、平成の元号も令和に変わり、あと数年すれば令和生まれの子ども達が小学校へ入学するようになります。

中学時代の思い出は色々ありますが、印象に残っている出来事の一つに天体観測があります。1. 2年生時の担任の先生が理科担当だったこともあり、クラスの皆で夜、七滝中学校（現在は解体され町立上野保育園の園舎があります。）の屋上で仰向けに寝転び星の観察を行いました。周りに明かりのついた建物もなく夜空に満天の星が輝き、流れ星が流れるたびにあっちこっちで歓声が起きました。（昭和60年代の出来事です。）また、天体望遠鏡を使って土星の輪を見たときはとても感動しました。このような体験から比較的他の教科に比べると理科が好きでした。同級生は男女問わず仲が良く、中学の同級生とは4年ごとのオリンピックの年に同窓会をすることが恒例となっています。当時の担任の先生方も参加され近況を報告しあい当時の思い出話で時間が経つのも忘れて盛り上がります。30年以上経って、久しぶりに再会しても一瞬にして中学時代に戻ってしまうから不思議です。

御船中学生の皆さんは、小学生では、熊本地震を経験し、現在は、コロナ禍での生活で思うように学校生活が送れない日々が続いていますが、そのような状況のなかでも勉強やスポーツなど、中学生生活を力いっぱい楽しんでほしいと思います。

皆さんが楽しい学校生活を送れるよう微力ではありますが応援していきます。

(学校日より 令和4年10月号)

ふるさとの先輩から

麻井 勝利さん (昭和62年3月 袴野中卒業)

私は御船町田代浅の藪という場所で育ちました。私が通った益城町及び御船町学校組合立袴野小中学校の同級生は、男子5名、女子5名の計10名でした。

小学校から中学校までの9年間を同じ同級生と過ごしました。学校には、益城町と御船

町在住の生徒はもちろんのこと、西原村から徒歩で通う先輩もいました。学校は益城町袴野という山間の地にあり、坂道を下る約1.5kmの道を歩いて登校し、帰りは部活動で疲れた体で同じ通学路の上り坂を頑張っただけで帰宅していたのを思い出します。

小さな学校で学んだことは勉強だけではなく、部活動も一生懸命に頑張っていました。部活動は少人数ながら男子はバレーボール部、女子は軟式テニス部でした。私たち男子バレーボール部は、冬になると陸上長距離をやり、各町の長距離走大会などに出場していました。バレーボールは弱小チームでしたが、真剣に練習に取り組んでいたことを覚えています。女子軟式テニス部は、郡内で優勝するなど良い成績を収めていました。授業は、少人数ということもあり、先生が一人一人に目が行き届き、十分な学習ができていました。

現在、自然豊かな場所で農業をやりながら、生まれ育った地域の活性化に取り組み毎日を過ごしています。

袴野小中学校は統廃合で今はありませんが、この学校で学んだことや頑張ったことは、ずっと胸に残っています。今の子どもたちや未来の子どもたちも、ふるさとを大切にしながら頑張っただけでほしいと思います。
(学校だより 令和4年9月号)

ふるさとの先輩から

井上 登さん(平成5年3月 御船中卒業)

中学校を卒業してから30年近く経ちました。当時は何かを特に頑張っているという意識はありませんでしたが、今思うと、勉強も部活も遊びも一所懸命で、テレビやゲームに費やす時間はあまりなかったように思います。この頃が、人生で一番楽しく充実した時期でした。

バスケットボール部に所属していました。体育館は建て替え前で、すごく古い体育館で練習していました。声が小さく、先輩からよく怒られていたのを覚えています。私たちの学年が中心となつてからのバスケットボール部は弱小で、全く勝てませんでした。ただ、ある大会の試合で、私が苦手だったフリースローを2回とも決め、みんなで必死になって初勝利したことがありました。その試合終了の瞬間、部員みんなで涙ぐんで喜んだことや、監督から「あのフリースローで勢い付いたぞ」と言われたことは、青春の思い出となっています。次の決勝戦では負けましたが、組み合わせ良くて県大会に出場できました。意気揚々と乗り込んだ県大会はコテンパンにやられましたが、これも良い経験になったと思います。

勉強も友だちと競い合っただけでよく頑張っていたと思います。しかし、中学卒業後は頑張ることが少なくなりました。当時は、良い大学に入って都会の企業に就職して、 트렌ディドラマのようなお洒落な生活をするんだろうと妄想していました。あのまま勉強を頑張っていたら・・・と思うことはありますが、御船での半スローライフ的な暮らしも良いと思っています。

これを書きながら、部活や勉強以外にも、めちゃくちゃ怒られたことや腹がよじれるほど笑ったことなどを思い出します。私にとって中学時代が一番思い出が詰まった時期です。

中学生のみなさんは、まさに今が青春。後悔することがないように、目標に向かって懸命に取り組み、美しく輝いてください。
(学校だより 令和4年8月号)

ふるさとの先輩から

吉住 奈美さん (平成20年3月 御船中卒業)

中学生のみなさん、御船町が好きですか？

私は生まれも育ちも御船町です。そして同級生と結婚し御船町に今も住んでいます。中学生時代にはこのような人生を送っていることを想像していませんでした。御船町は、自然溢れる、人と人との関わりが温かい町です。隣近所の付き合いがあり、野菜や作ったお饅頭をおすそわけしてくれる、「仕事かい？いってらっしゃい」といつも声をかけてくれる、温かい日常があります。

私は、よく田んぼ道を散歩します。夕日と稲田の光景はとても綺麗です。心が穏やかになるのです。子どもができたなら、一緒に散歩をしてこの風景を見せてあげたいと思います。皆さんも、何気なく通っている道で立ち止まり、周りの景色を眺めてはどうでしょう。

私は中学3年間、バスケットボール部に所属していました。当時の仲間といつも話題になるのは、夏の走り込みです。夏休み中、ほとんどボールを持つことなく炎天下にグラウンドを走るのです。私は上手な方ではなく、試合にあまり出れませんでした。練習も過酷で辞めたくりましたが、両親に反対されて渋々続けていました。最後まで続けてみて、辛くても頑張ったことや、辛さを乗り越えた仲間がいることに意味があるのだと思いました。

大人になって分かることは、辞めることも大切であり、もう少し頑張れるのであれば頑張ることも大切であるということです。自分が納得がいくまでやってみることで、きっと後悔しない人生になると思います。今を精一杯努力し、今を楽しんでください。

(学校だより 令和4年7月号)

ふるさとの先輩から

増田 英宏さん (昭和52年3月 七滝中卒業)

私が中学生だったのは、昭和50年代の初頭、少し前にオイルショックを経験し、農村地域では減反政策が少しずつ浸透していた頃でした。それまでの右肩上がりの経済にも少し陰りが見え始めていました。

朝夕、路線バスは満員だったし、最後の酒蔵、菊の露もありました。眼鏡橋の雄姿も見ることができました。何よりも子どもが今よりたくさんいました。多くの家庭が中流意識をもち、格差社会という言葉も無く、経済の拡大は永遠に続くと思っていました。

現在の社会は、当時と比べると少し生きづらくなったように感じます。そんな中に御船町の子どもたちの新聞投稿に目を引かれます。学校生活で感じることや将来の夢、御船の

史跡や景勝地の魅力などが綴られていて、自分の中学時代からすると雲泥の差です。皆さんが社会人になっても同じように考えてくれたら、日本の社会や御船町も、もっと良くなることでしょう。私は御船町で農業に従事しています。近年は、害獣被害や熊本地震、天候不順に苦しんでいます。しかし、地域の保全も含めて作業に励んでいます。その中に夢があります。ふるさと納税の返礼品として皆さんに喜んでもらえるような農産物、加工品を生産することです。アイデアはいろいろとありますが、形にするにはまだ至っていません。少しでも地域を盛り上げたいと考えています。中学生のみなさんも夢をもって頑張ってください。（学校だより 令和4年6月号）

ふるさとの先輩から

江原 誠さん（昭和54年3月 御船中卒業）

御船中学校を卒業して43年が過ぎました。ちょうど木造の古い校舎から最新の鉄筋校舎に建て替わり「新校舎」として使い始めた頃でした。

丸刈り頭と慣れない自転車通学でスタートした中学校生活は、想像もつかないくらいの厳しい指導があったり、先輩と後輩の関係があったりしましたが、今になって振り返ると、そんな関係の中にもたくさんの愛情や期待があったのだと思います。

中学校生活で、成長させてくれたことの一つに部活動があります。小学校の頃から憧れた先輩が卓球部に入っていたので、迷わず卓球部入部を決めました。当時の卓球部は、練習の厳しいこと厳しいこと。最初の中体連大会が終わるまでの3ヶ月以上、ほとんどが「素振り」と「球拾い」。それでも、球拾いをしながら、強くてカッコいい先輩方のプレーを見る毎日の練習時間が楽しくて仕方ありませんでした。

3年生まで続けた卓球も、試合ではたいした成績は残せませんでした。礼儀やルールを守ること、きつくても我慢することを学び、やり遂げた後でしか味わえない充実感も感じることができました。25年ほど前に御船町に戻ったとき、縁あって卓球部の先輩から誘われ再び卓球をするようになりました。中学生の頃お世話になった外部コーチの方と再会することもできました。

私の頃と大きく時代は変わりましたが、中学生にしか味わえない楽しさは今もきっとあるでしょう。思いっきり打ち込める何かを見つけ、思い出いっぱいの3年間を過ごしてほしいと願っています。（学校だより 令和4年5月号）

ふるさとの先輩から

上村良親さん（昭和45年3月 滝水中卒業）

私が生まれて育ったところは、御船中学校から南へ約8kmの水越地区（田畑）で、通っていた水越小学校は平成17年に閉校になってしまいました。当時は、全校児童は20

0人を超えていて、一学年は1クラスしかありませんでしたが、気の良い仲間たちばかりでした。まだ保育園もなく小学が保育園代わりになっていて、鉄棒やブランコの遊具で遊んだり授業を窓越しに覗いたりして、先生に怒られていたことを思い出します。

中学校は滝水中学校でしたが、平成13年に閉校しています。中学校の3年間は、部活動のバレーボールに明け暮れていました。3年生の昭和44年は、東大紛争、アポロ11号の月面着陸など歴史的な出来事がありました。バレーボール部は、3年生になると県内の多くの大会で優勝し、県中体連でも優勝することができました。後輩たちも頑張り、バレーボールに「滝水あり」と言われ、「小さな学校でもやればできるんだ!」と自信が持てるようになりました。卒業後は、正月にOB会を開催し、30回目を記念の区切りとして終了しました。

地元の御船町役場に入庁し、主に建設業務として下水道やシンボルロード線・恐竜公園の整備に関わることができました。その後、社会福祉協議会に勤務し、翌年の熊本地震で経験したことのない大災害に遭遇しました。直後の被災者支援活動は、昼夜に亘る職員の頑張りや応援してくれた多くのボランティアの皆さんの助けもあり、どうにか乗り越えることができました。本当にありがとうございました。

最後になりますが、私も結婚し、家族を持つことができ子どもたちもそれぞれに家庭を築き、おかげさまで孫たちも元気に育っています。4月からは、その中の一人が御船中学校に入学しますので、皆さんよろしくお祈りします。

(学校だより 令和4年4月号)

ふるさとの先輩から

坂田友紀さん(平成元年3月 御船中卒業)

私は生まれも育ちもこの御船です。この御船に住んで良かったと思うことが二つあります。

一つ目は自然です。家の近くには御船川が流れています。小学校時代の登下校では、沿道に茂っている草花で遊び、近道と称しては田んぼを横切って帰っていました。眼鏡橋もまだ、残っていて、写生大会の時は必ず行く場所でした。俳句を作る授業では、稲刈り終わった田んぼに寝そべり空を眺めながら句を考えたこともありました。小中学校時代を自然豊かな中で過ごすことができました。

そしてもう一つはご地域の方です。

最近マスメディアでは近所づきあいがなくなったといわれることが多くなりましたが、この御船ではそんなことはありません。私の子どもたちも、近所の方がいつも見守ってくださいます。「あいさつば上手にしようよ」とほめてくださいます。子どもに伝えるとうれしそうです。そして、またあいさつをしているようです。私が「あいさつをしてね」と言うより近所の方がほめてくださった言葉が行動の原動力になっています。また、子どもたちを叱ってくださいます。「ごみ置き場の上ののって遊びようよ。落ちたらあぶなかよっていっとったけんね。」成長すると子どもたちの行動範囲は広がります。そして、親の目を盗んでいたずらもします。そんな時に声をかけてくださり、地域で過ごすル

ールを教えてください。地域で育ててもらっていると実感します。このようにほめたり、叱ったりしてくれる地域の方は子どもたちだけではなく、私自身にもありがたい存在です。

この御船は、昔も今も変わらない自然が残り、声をかけてくださるおじちゃんやおばちゃんがいらっしやいます。みなさんも、御船で生まれ育ったことをぜひ誇りに思っしてほしいと思います。こんなすてきな町は他にはありませんよ。

(学校だより 令和4年3月号)

ふるさとの先輩から

山下直樹さん(昭和63年3月 七滝中卒業)

私は、中学校では野球をしたいと思っていましたが、野球部がなかったため、陸上部になんとなく入部しました。しかし、なんとなく入部した陸上は、その後の自分の人生に大きな影響を与えることになりました。

入部してすぐに1500メートルのタイムを測ると自分の実力は、ちょうど真ん中くらいでした。私は、どうしても秋の郡中体連駅伝に出走したいという目標があり、自分なりに努力をして、試走で何回もタイムトライアルをして、やっと郡中体連駅伝の一年生区間のレギュラーを取ることができました。結果、大会の雰囲気にもまれ、前半突っ込みすぎて、後半失速し、試走のタイムよりも悪く、三年生にとっての最後の大会に花を添えることはできず、とても悔しい思いをしました。自分のメンタルの弱さを改めて感じました。2年生の秋から冬にかけてタイムが一気に伸びてきて郡市対抗熊日駅伝大会の上益城郡チームの補員に選ばれることができました。そのあとに開催された益城町一周駅伝では区間賞をとり、チームの優勝に貢献することができました。陸上は孤独なスポーツでもあるので、自分自身に勝つということも競技力を向上させるためには大事なことだと考えました。3年になると本当にいいチームができました。結果、郡中体連駅伝大会優勝、県中体連駅伝大会4位という成績を残すことができました。その当時の陸上部の顧問の先生とは今でもたまに会うことがあります。その後、転勤された学校でも陸上部の顧問として活躍されており、素晴らしい選手を育てられています。山間地の学校でもチーム一丸となって目標に向かって頑張って走った日々が懐かしいです。

このような経験から、失敗することで自分を見つめなおすことや考えることの大事さ、それが、自分自身の成長に繋がるということを学ぶことができました。陸上を通していろいろな人との出会いがあって、自分の宝物となっているので今後も大事にしていきたいと思います。

(学校だより 令和4年2月号)

ふるさとの先輩から

北本修吾さん(昭和44年3月 御船中卒業)

御船中を卒業して52年。私たちの中学時代は、東京～大阪間に新幹線が開業し、東京オリンピックが終わった頃です。各学年7クラスの木造校舎、昼食は弁当持参でした。

中1の夏休み、うだるような暑い日に、同級生4～5名連れだって、高木小校区にある農業用ため池で泳ぎました。水深2～3mの青緑色、水底は冷たくスリル満点でした。ところが、泳いでいる最中に、御船中の先生方が突然現われ、職員室で全員きびしく注意を受けました。その時の楽しさも吹っ飛んでしまいました。

現在、全国の河や海で中高生の死亡事故が発生しています。「違反水泳が見つかって良かった」と今では思っています。

私が中1の頃には、不愉快だった時期がありました。同級生から「ゲタ」とか「エラ」と、あだ名で呼ばれた時でした。私の顔が角張っていたからでしょう。兄の勧めで剣道部に入り、毎日大声を出し、全身汗だくで体を鍛えていくうちに、あだ名で呼ばれなくなりました。おそらく、私の気力・体力が充実し剣道仲間の存在が大きかったと思います。

中2の時には、生徒会選挙の新会長に立候補しました。結果は見事に落選。がっかりしていた私に、剣道部のS先輩が「北本に1票入れたのに、残念だったな」と声をかけられ、この一言に励まされました。こういう貴重な体験等から、大勢の人前で話すことが苦にならなくなっていました。

私は、中学から高校の剣道体験を通して、教科書には書いていない『免疫』ができてきたと思っています。部活動体験は、社会人になって役立っています。

思春期の中学生は失敗したり道に迷ったりする時期です。そんな時は、一人悩まずに家庭や信頼できる人と相談し、直面する壁を乗り越えて進んでください。

(学校だより 令和4年1月号)

ふるさとの先輩から

中熊博明さん(昭和36年3月 御船中卒業)

私が、御船中学校を卒業してから早いもので60年が経ちました。私は、何度か中学校の授業参観を経験させてもらいましたが、参観の度に感動することがあります。それは、先生方が生徒の中に入って優しく熱意をもって指導されており、生徒たちも明るく楽しそうに勉強している姿が随所で散見され、先生と生徒の間に距離がなく素晴らしい環境で勉強が出来ていることです。

私の中学時代は、終戦から10数年しか経っていないため、どこの家庭でもテレビなどを購入する経済的な余裕などはなく、食べるのに精一杯の状態であるため、進学を諦めて就職をする人が数多くいました。校内では、今では考えられないような喧嘩やいたずら、いじめなどが横行していましたが、憲法が保障する基本的人権について、マスコミを含めた社会全体が十分に理解していなかったためだと思います。

私は、御船中学校を卒業後、地元の御船高校から大学まで進学させてもらいましたが、尊敬する先輩から「戦後間もない日本人の平均寿命は50歳。これからの日本人は100歳まで生きる。昔の人より2倍も勉強できるし、2倍も善行を施すことができる時間がある。」と言って、古代中国の春秋戦国を生き抜いた儒家である荀子の勸学篇を読むように

勧められました。 勸学篇には、「人は生まれつき私利私欲に走りがちになるもので、必ずしも“性善”ではなく、むしろ“性悪”であって、これを善に正すべく努力する。これが人の道であり、従って、人間にとって重要なのは天賦の才ではない。後天的な努力や勤勉さ、善行の積み重ねである」と繰り返し説いてあります。御船中の後輩の皆さん、中学時代の学業成績だけで人間の価値は決められません。高校、大学、社会人となってもあらゆる努力を続けること、そして、善行を積み重ねることが人間として大切なことです。頑張ってください。 (学校だより 令和3年12月号)

ふるさとの先輩から

佐藤智子さん (緑川中卒業)

私たち同級生4人は、幼い頃からの仲間で、中学入学と同時に緑川中のソフト部に入部しました。私以外の3人は、体格も良く、守備も打力も抜群で1年目にしてレギュラーになりました。私は、当時は痩せて体格も中位。3人についていきたくて無理しながら練習し、私が左利きなこともあってピッチャーとしてマウンドに立てるまでになりました。友だちや部員、先生に励まされ、温かい眼差しに見守られて上達できたのです。私たち4人は、ライバルでありながら、エラーをすれば誰かがカバーし合う仲でした。数十年の歳月が過ぎた今も変わらない絆で結ばれています。

当時の部活動は、学校内を沸かせていて、ソフト部は2年生、3年生の時に連続して郡大会で優勝し、県大会にも連続出場しました。私たちの母校、緑川中は、その後廃校となりましたが、緑中ソフト部の全盛期を築くことができました。

来る日も来る日も部活に明け暮れましたが、勉強も部活も頑張るという気迫に支えられ、くたくたに疲れ汗にまみれても夜は宿題と闘いました。眠気覚ましにバケツの水で足を冷やし、天井等のいたる所に英語の単語を貼って覚えていたのは懐かしい思い出です。

その頃の一番の記憶は、真夏のジリジリ太陽の照りつける中で、マウンドの中央で一球一球のボールを握りしめたあの日のことです。緊張感が走り、吹き出す汗。自己との闘いでしょうか。この時、私は何事にも怯まない心や精神力が培われたと思います。今在る私の原点です。

私は社会に出て、「生け花」という“動”とは真逆の“静”の職業を歩いて参りました。

しかし、何処にあらうと、立志の時の姿勢は、マウンドに立った、あの気力そのものです。

当時の純粋でまっしぐらに努力を惜しまなかった日々が尊く思い出されます。

(学校だより 令和3年10月号)

ふるさとの先輩から

西田圭さん (平成元年3月 御船中卒業)

私にとっての中学校の3年間は、人生の基礎になっています。中学校時代の一番の思い出は部活動です。 厳しい指導の先生と一緒に過ごしたことが思い出されます。姉が吹奏楽

部に所属していたため、3年生の吹奏楽部員から練習見学に誘われました。その場の雰囲気ですら断れない状況で入部してしまいました。

希望楽器はトランペットでした。しかし、ユーフォニアムというあまり知られていない楽器が担当になりました。しかし、この楽器の魅力に魂が揺さぶられました。ラジオの音楽番組や楽器のCDを探し求め、勉強を重ねました。また、顧問の先生がとても厳しく、年間の休みは正月とお盆くらいだったと記憶しています。繰り返しの反復練習で徹底した指導をしていただきました。目標は、県吹奏楽コンクール金賞。厳しい演習が辛いこともありましたが、仲間の支えや楽器・音楽の魅力で耐えることができました。顧問の先生や仲間のおかげで部活や音楽が大好きになりました。吹奏楽コンクールでは、金賞を受賞することもできました。努力することで結果はついてくる。夢は努力で現実になると知った瞬間でした。今でも、御船中で過ごすことができたといい良かったです。

中学生の皆さん、「努力することで結果はついてきます。夢は努力で現実になります。」

中学生時代は、自分の可能性を見つけることができる“原石”が無数にキラキラと散らばっています。

中学校生活の活動を一生懸命にやることで人生の可能性を広げられます。

私は、御船中で過ごしたことを誇りに思い、今も、御船中に感謝しています。

(学校だより 令和3年9月号)

ふるさとの先輩から

田中泰浩さん(昭和59年 御船中卒業)

私は御船町木倉の出身です。早いもので、私が御船中学校を卒業してから30数年が経ちます。

当時は、御船、木倉、滝尾、高木、小坂校区の生徒たちが御船中学校に通っていました。私たちが入学した年から5クラスになり、教室が新しく増築されたのを憶えています。

部活は、小学校から習っていた剣道部に入部しました。同級生部員は6名と多くはありませんでしたが、御船町武道館(現御船町役場第2分庁舎)で3年間、切磋琢磨しながら竹刀を降り続けていた思い出があります。その甲斐もあってか、3年生の中体連では、団体が優勝することが出来ました。とても貴重な経験になりました。

現在、我が子も御船中学校に通っています。久しぶりに昔と変わらない教室や廊下を見ますと、友だちと遊んだり勉強したりしていた当時の懐かしい記憶が思い出されるのと同時に、親子で同じ中学校に通えたことに、とても嬉しさを感じています。また、ご縁もあり、現在、PTA副会長もさせていただいています。

子ども達のため、自分の母校のために何か出来ないかを考え、学校・PTA・地元地域と協力しながら少しでもお役に立てるように努めていきたいと思っています。

中学校の3年間は、心も体も大きく成長する時期だと思います。みなさんも友だちと楽しい時間を過ごし、勉強や部活動に頑張り、いろいろな経験をしながら将来の夢・目標のために一日一日を大切に、努力を積み重ねて自分を磨いてください。

(学校だより 令和3年8月号)

ふるさとの先輩から

沖田昌史さん（昭和46年3月 御船中卒業）

御船中学校を卒業してちょうど50年。京都での4年間の大学時代以外はずっと御船町に住んでいます。御船町の自然や歴史が大好きです。

私にとっての中学時代は、挫折と忍耐の時代だったと思います。剣道部に入ったものの、1年の夏に両耳難聴となり、その後手術して右は少し回復しましたが、左は全く聞こえず、現在も続いています。月に一度、学校を休んで国立病院に通院。部活もやめ、夏の水泳の授業も見学。御船小学校時代は器楽合奏部で、将来は音楽家にとの夢もありましたが、幻となりました。聞こえないこともあって、友達との会話も減り、休み時間は図書室で一人読書するしかありませんでした。

勉強は頑張りませんでしたが、図書室では、片っ端から偉人伝や小説を読み漁り、本が友達となり、卒業時には図書の貸し出し冊数が同級生を大きく引き離しての1番となっていました。

内向的で人と話すと吃音がひどくなり、よくクラスメイトに揶揄われることもありました。そんなコンプレックスの塊だった私が、図書室で森鷗外の『高瀬舟』に出会い、進学した御船高校で一人の先輩との出会い、自分の興味を知り、前向きに生きることの大切さに気付かされていきました。【幸せは自分の心が決める】という言葉に出会ったのも、その頃です。恵まれた環境で成績もトップクラスであっても、「思い通りにならない」と苦しむ同級生がいることも知りました。

同じ人生なら、できることに感謝し、「どうせ」とか「他人が悪い」と周りの人のせいにならず、「ありがとう」「おかげさま」を素直に声に出す人生を送りたいと思いました。

中学時代が楽しいと感じられなくても、必ず良い時が来ると信じるのが大切だと思います。今、町や地域、先輩や後輩に支えられて楽しく活動しています。御船中学卒業生で良かったと思います。
(学校だより 令和3年7月号)

ふるさとの先輩から

本田尚一さん（昭和46年3月 御船中卒業）

中学校を卒業して半世紀。私の思い出は、中体連大会（軟式テニス部）、生徒会活動、文化祭（合唱コンクール）、弁論大会等があります。その中で、最も心に刻まれているのは駅伝と受験勉強の両立でした。

中学3年の夏、部活動は郡中体連3連覇を達成し、受験勉強にシフト変換という時期になっていました。その時、恩師芥川満先生（当時体育主任、御船町在住）から、「陸上競技大会や駅伝大会に出てみないか」とお誘いを受けました。程なく、各部から招集された20人程が、御岳中学校での合宿から始まり、毎日ハードな練習と受験勉強の両立に挑むこととなりました。

日課は、朝夕の課外と普通授業を併せ9時間授業。放課後は陸上の練習があり、肉体的にも精神的にも厳しい毎日となりました。当初いたメンバーも一人、二人・・・と減っていきました。長距離走の記録向上と受験勉強への取組みの両立で、焦りと不安な気持ちが

ピークになりました。「苦しい」「逃げ出したい」。しかし、やるしかありません。そんな私たちに厳しくも優しくご指導いただいた先生方、物心両面で支えてくれた親、互いに励まし合った仲間たちの存在は大きく、おかげで何とか乗り切ることができました。陸上競技大会の結果は満足するものではありませんでしたが、それでも代表2000mで6位入賞。駅伝大会では団体3位、個人で区間2位。高校受験では希望校合格を勝ち取ることができました。本当にお世話になった方への感謝と充実感・達成感でいっぱいになりました。

今でも、同窓会で昔話に花が咲きます。あれから50年。これまでお世話になった方々への恩返しは出来たのだろうかと思いつき振り返る今日この頃です。

最後に、御船中学校生徒諸君へ次の言葉を贈ります。

「負けるな、負けるな。今の自分に負けるな。一つ一つに勝ちきって大声で笑おうじゃないか。そして今を楽しもう。」グッドラック！ (学校だより 令和3年6月号)

ふるさとの先輩から

野口真弥さん(昭和54年3月袴野中卒業)

私が卒業した中学校は、「益城町及び御船町中小学校組合立袴野中学校」という、ちょっと長い正式名称の学校ですが、児童生徒数の減少により、平成25年に惜しまれながらも閉校となりました。職員室をはさんで長い一本の廊下(100mぐらいあったかな)で小・中学校がつながり、小学1年生から中学3年生が同じ屋根の下で勉学を共にしていました。

昼休みともなれば、運動場に小学生や中学生が入り混じって、よくソフトボールをして遊んでいたことを思い出します。また、運動会や文化祭などの行事も一緒に実施していました。他の学校では経験できない、今思うと貴重な中学校時代だったように思います。

私が通っていた頃は、同級生が10人前後の小規模校になっていましたので、部活動はシーズン制(春～夏はバレー部、秋～冬は陸上部)で頑張っていました。顧問の先生からは「大きな学校に負けるな。君たちならできる。」と、叱咤激励の言葉をよくかけられました。バレーでは、当時県No.1の甲佐中にサービスエースでとった2点や郡中体連陸上大会1500mで3位入賞し、大会会長の講評の中で「小規模校でも頑張ればできる」と、ほめていただいたことを今でもよく覚えています。

小規模校で、一人何役も任せられていたので、とても充実し思い出多き学校生活でした。当時の恩師に憧れて教師の道に進み、現在も小学校の先生として頑張っています。

今振り返ってみると、いろいろな経験などが現在の自分につながっていると感ずることがよくあります。「人生にむだな経験など、何一つない」と思います。中学校生活の中で、“自分の可能性”や“まだ知らない自分”を見いだすために、いろいろなことにチャレンジしてみてください。(学校だより 令和3年5月号)

ふるさとの先輩から

古閑謙治さん（昭和52年3月七滝中卒業）

幼少期は、上野の「古閑の原」という集落で育ちました。遊び用具を買ってもらうようなことはなく、すべて自分で作り出すものでした。常にポケットには小刀を入れ、時には家からなたやのこぎりを持ち出し、近くの山に行き竹を切ってきては、竹鉄砲や弓、竹馬等を作って遊んでいました。また、山に行き鳥の罠をかけた、川や天君ダムに行き魚釣りもよくしていました。その都度、どのようにしたら竹鉄砲が飛ぶようになるのか、どのようにしたら魚が釣れるのか、どのようにしたら鳥が罠にかかるのかなど、工夫を重ねていました。今になってみれば、「どのように工夫したらうまくいくのか」の考える力を培っていたように思います。地域の方々、山に行き勝手に竹を切ったり、罠をかけたとしても何も言われず、温かく見守られ、よく声をかけていただき育ちました。

平成3年、教員として2校目で母校の上野小学校に赴任しました。そこでは、幼少期に見守っていただいた地域の方々、そして同級生や先輩後輩の方々に囲まれて7年を過ごしました。同級生のお子さんを担任させていただく機会にも何回か恵まれ、同級生からのサポートは、とても温かく心強かったことを覚えています。当時担任していた児童が今は立派な社会人として活躍していることを聞くと、うれしくなります。

平成29年には、教頭として木倉小学校に赴任しました。保護者の方々をはじめ、地域の方々が子どもたちのことを温かく見守り、たくさんの支援をいただいていることにとてもありがたく感じました。地域と学校が子どもの健やかな成長を願って協力し合うことの大切さを学ばせていただきました。

御船町の豊かな自然、温かな人情に支えられてきたことに感謝の気持ちでいっぱいです。御船中学校の皆さんの活躍を町民の一員として応援していきたいと思っております。

（学校だより 令和3年4月号）

ふるさとの先輩から

竹下渉さん（平成11年3月 滝水中卒業）

私は御船町内の水越出身です。中学校は、御船町立滝水中学校に通っていましたが、生徒数の減少により、平成13年4月に御船中と統合しています。

当時、同級生は私を含め7人。1学年上は5人、下は2人と、とても小規模の中学校でした。

全校生徒が少人数の為、部活動は男子はバレーボール部、女子は軟式テニス部。秋には掛け持ちで陸上を全生徒で取り組んでいました。

当時の10年程前が男子バレーボールの黄金期。県内でも屈指の強豪校だったようです。その栄光を証明するかの様に、トロフィーが何本も並んでいたことを覚えています。そんな歴史と伝統のある男子バレーボール部の先輩方を目標に部活に励んでいたことを思い出します。

現在、我が子は御船中学校に通っています。ご縁もあり、過去にPTAの役員などを経験させていただきました。子どもたちの為に何かできないかを考え、取り組んできました。

今回、中学生時代・母校について寄稿をさせていただく機会を得、振り返ってみれば、私の中学生当時、私の親も含め保護者の皆さんや地域の皆さんの支えがあつての学校生活だったのかと気づかされます。

いつの時代も、家庭、PTA、地域と協力して子育てをしているのだと深く感じます。

最近、中学生の悲しいニュースなどを目にするがあります。社会情勢が目まぐるしく変化する中でも、私たち大人が協力し合い、しっかりと子どもたちと向き合い、共に成長することがとても重要だと考えています。

未来を担う子どもたちの中学校生活は、一生のうち、たった一度きりの3年間です。

今一度、「今しかできないこと」を考え、皆さんも子どもたちと向き合ってみては、いかがでしょうか。
(学校だより 令和3年3月号)

ふるさとの先輩から

村上伸一郎さん(昭和51年3月 御船中卒業)

早いもので、この春、定年退職を迎えることになります。自分は生まれ育った御船町が大好きです。子どもの頃は4丁目の竹山で“すみか”をつくり、御船川で泳いだり野や山をかけめぐり自然に触れ育ちました。小さい頃、よく父から体操を教えてもらっていました。そのころの日本の男子体操は黄金期。自分も将来オリンピックに出場することが夢でした。

御船小を卒業し、旧体育館に遊びに行った時のこと。体操部は練習していなく、練習していたのはバスケット部の先輩達。そこで運命的な出会いがありました。当時148cmの自分に、寄り添ってきた170cm以上の体の大きい先輩達から「バスケしたら身長が伸びるよ。」と誘われ、体操部ではなく友達と一緒にバスケット部に入部。練習はとても厳しく、辺田見1週のランニングやウサギ跳び、腹筋100回、足上げ腹筋10分、重りが入った靴で練習していました。14名程いた同級生部員は夏休みが終わると6名に減っていました。

新チームになり、とにかく強いチームと練習試合を行いました。100点差で負けた経験もあります。頑張った甲斐あって郡大会で優勝し県大会に2回出場しました。ここで忘れられない出来事が発生します。中3の最後の中体連。通常6月開催なのに、なぜかバスケットだけが11月に延期。部員みんなに衝撃が走りました。受験も心配だし、「やっとなれん。もうやめよう。」という気持ちになりました。しかし、当時キャプテンの河地君(現滝尾小校長)が「みんなやめても俺一人でも頑張る。」と言い切った言葉にみんなが奮起しました。そして、最後の中体連を優勝することができました。それから高校、大学、教員、一般と今もバスケを続けていますが、今の自分があるのは中学校での経験です。全ての人に感謝しています。みんなも夢や目標を持ち、努力を積み重ねて自分を磨いてほしいと思います。頑張ってください。
(学校だより 令和3年2月号)

ふるさとの先輩から

山本貴一さん（平成4年3月 御船中卒業）

子ども時代を御船町で育った私。当時は、御船での生活を嘆いていました。「御船って熊本市に通勤する人の町って感じで何も無いよな。何だか中途半端だな。」私は熊本市の生活にあこがれていました。将来も、都会でアナウンサーになって脚光を浴びるんだと調子に乗っていました。

そんな私に、小学校5年生時の担任の先生が「御船のいいところを探したらどう。」と言いました。私は初めて地図帳を広げました。御船と言えば“マイン”しか思い当たらない私。数々の石橋や吉無田高原、宮部鼎蔵などの名所旧跡、先哲たちをその時に知ります。

「御船にも自慢できるものがあるじゃないか！！。」単純です。それから「地図」に興味湧くのに時間はかかりませんでした。寝る前も地図。お風呂にも地図。とにかく地図が好きになりました。そんな地図好きが功を奏して、社会科教師という仕事に結びつくとは思っていませんでした。

それから、30年ほどが経ち、後輩たちに社会科を教えています。不思議な感覚です。生徒の中には、当時の私と同じように、都会にあこがれ、ふるさと御船のことを前向きに捉えられない生徒もいます。確かに御船町は物質的な豊かさに恵まれている方とは言えないかもしれませんが。しかし、自然環境や文化、歴史といった非物質的な豊かさ、心を豊かにしてくれるものに恵まれている「良い町」です。みなさんも心のどこかでは気付いているのではないのでしょうか。そんな中学生にお願いしたいことがあります。それは、「今ある財産を大切に、御船町の未来を考えてほしい」ということです。中学生にしか思いつかないような素晴らしいアイデアが出るような気がします。

「ふるさとの未来を積極的に考える」、そんな生徒を育てることが、ふるさとで教壇に立っている私の役割のような気がしてなりません。

（学校だより 令和3年1月号）